

七転び七起きの介護記録 ①



ミッツ 伊志井

《 父さんが倒れた 》

その電話があったのは、日曜日の昼、いつものように家族で昼食を取りながらくつろいでいるときのことだった。

「お父さんが……。どうしよう……。？」

母の声は動揺していて要を得ない。判ったのは、「父が倒れた、SOS」ということだけだった。詳しい状況も把握できぬまま、「今すぐ行くから」と電話を切り、車に飛び乗った。実家まで 30 分、焦るな、落ち着けと自分に言い聞かせ、ハンドルを握りしめる。



「お父さん！！」

父は寝室にしている和室で、横になって唸っていた。

顔を見ると、額と頬に擦過傷、止まりかけた鼻血。しかし、意識ははっきりしている。「痛い、痛い」「動けない」と言う。意識があることに少し安心し、そばでおろおろしている母から話を聞く。

要領を得ない話を無理矢理要約すると、以下のとおり。——今朝のこと、遅い朝食の後、父は寒いのでもう一度寝ると寝室に戻った。しばらくして様子を見に来てみると、畳の上にはぼったり倒れて動かない。体格の違う父を苦勞して起こしてもずるずるとまた倒れこんでしまう。体中どこを触っても「痛い」というだけで、自力では手も足も動かせない。どうしようもないから、朝からずっとこうしている。



「お父さん、どうしたの？」

「どうもしとらん」



どうもしていないと答えても、動くことはできない。こんなに動けないってどういうことなの？ 骨折？ 脳梗塞？ 医療知識皆無の頭で考える。考えたってわかるわけがない。とにかく、お医者に見せなくっちゃ。

でも……。うーん、これじゃ、受診したくても車にも乗せられないなあ。救急車って言葉が

脳裏に浮かぶ。が、こんなに意識のはっきりした人間のために、救急要請していいものかしら？ 救急車をタクシー代わりに使う人が多くて困るって話を聞いたし……。と迷うが、こうしていても埒が明かないので、思い切って 119 番通報をする。

「救急車をお願いします。」

通報から、5 分もしないうちに救急車はやってきた。救急救命士は、横になっている父を見るなり、「転びましたね。脊髓損傷の恐れがあります。」と、父を頭から足まできっちり固定して、ストレッチャーに乗せた。

父は、市立市民病院の救急センターに搬送された。

付き添って診察室に入れるとばかり思っていた私や母にとって、「ここでお待ちください」と言われて、待合室で待つ時間の長いこと。診察やら検査やらがあり、永遠とも思われるような時間が過ぎてから、ようやくスタッフに呼ばれて、処置室に通された。

担当医から母に質問される。

「ご主人は転んでないとおっしゃっていますが、転ばれましたね？」

「転ぶところは見ていないけど……。部屋に行ったら倒れていました」

「ご主人が倒れるとき、大きな物音を聞かれませんでしたか？」

「音……。？ さあ……。」

母の話も心もとない。

つい、父に向かって口をはさんでしまう。

「お父さん、ここへ来る前に転んだでしょう？」

「転んどれせんだろ？ 転んだか？」

それをはっきり記憶できていれば認知症じゃないですよ。



家具の端か畳のへりにでもつまずいて転倒し、手が出ないので顔面から畳の上にバツタリ。

首を強打し、頸髄損傷による四肢の不全麻痺という診断であった。

担当医は冷静に告げた。

「手術をすれば、回復の見込みがあります。」

回復の見込みがある・・言い換えれば、回復するという保証はないということ。加えて、手術後、認知症が進む恐れもある。また、本人は手術なんてまっぴらごめんと思っている。

母と、後から病院に駆け付けた弟とも相談して、手術は受けないことに決めた。

「そうですか。ここは急性期の病院ですので、手術されないとすると、することはありません。」

「することはないって。それは、帰れってことですか？」

「動けなくては、家に帰っても困るでしょうから、今日は入院させます。」

「ありがとうございます」

と安心したのも束の間、担当医のきびしい言葉。

「ですが、ここでは何もできないから、早くリハビリ病院を見つけて移ってください。」

さらに、追い打ちをかけるように、

「認知症があるから、入院は個室です。今夜からご家族で付添いをお願いします」

80 歳過ぎの母に夜間の付添いはさせられないし、弟は早朝から遠い三河にまで通勤しているので、付き添うとなったら、勤務時間の短い私しかないわなあ。

私は、母と弟に向かって言っていた。

「私が付き添うわ。」

あ〜あ、言ってしまった。長女の性分か、すぐに、自分がやると言ってしまう。私も非正規ながらも責任ある仕事を任されているし、家には 90 歳になる姑を抱えている。何もかもできるはずがない。お互いにできることをしようね、と言っておけばよいものを・・・。

しかし、一度口から出た言葉は取り消せない。とりわけ、二人のあからさまにほっとした顔を見てしまった後には。

「お母さんは家に帰って、当面入院に必要なものを用意して。あんたは、お母さんを家に送って、用意してもらったものを持ってきてね」



整形外科の病棟に移された父は、不機嫌この上もない。

「なんで、こんなもんがついとる。外してくれ」

損傷した頸髄を保護するために、首の回りは硬い装具でがっちり固められていて、唯一動くはずの首を自由に動かすことができない。

「お父さんが動けないのは首が悪いからだって。もっと悪くならないように、守ってるんだから、外せないよ」

とりあえず、説明を試みる。

「そうか」

一旦は納得したような声を出すのが、三分後には「外してくれ」とまた言う。

入院初日は、「外せ」「外せない」の繰り返しだった。



そうこうしているうちに、夕食が運ばれてきた。なんと、全くの普通食だ。

この状態で食べられるかしら？と心配ではあるが、ベッドを少し立ててみる。体を起こしておくことはできず、傾いてしまうのだが、食欲は旺盛で、スプーンを口元に持っていくと直ぐに食べた。むしゃむしゃと口を動かし、喉の奥へ消えていく。

手足は動かせなくても、嚥下には問題ないらしい。父にもまず一つ、できることが残されていた。万歳。食べられれば生きていける。



父が眠りについた後、付添い用の簡易ベッドの上に横になって、私はぼんやりと考えていた。

仕事があり家族があり、何もかもほっぽり出して介護に専念するというわけにはいかない。でも、亡くなった舅のときにした介護を、実父にしないというのは、自分自身に許せない。できる限りの介護をしようと思った。

七転び八起きなんて到底無理だから、七転び七起きの介護をしよう、転びっぱなしじゃ困るが、転んだ数だけ起き上がればいいじゃない。それなら、無理しなくても出来るんじゃないのと。

こうして、父の入院生活、私の介護生活が始まった。

